京大広報

Kyoto University

※ P4864 参照

※ P4861 参照 ©Claudia Höhne/Körber-Stiftung

※ P4867 参照

2017.7
No. 730

目 次

［巻頭言］

大学を取り巻く状況 …… 4849
総務・労務・人事担当理事　森田　正信

［大学の動き］

●名誉教授懇談会を開催 …… 4851
●京都大学春秋講義（平成29年度春季講義）を開催 …… 4851
●クロックタワーコンサートを開催 …… 4852
●平成29年度 総長裁量経費採択事項 …… 4853
●指定国立大学法人に指定 …… 4855
●京都大学 ASEAN 拠点から国際交流基金バンコク日本文化センターへ学術情報メディアセンター開発 CALL（Computer Assisted Language Learning）教材を贈呈 …… 4857
●稲葉カヨ 理事・副学長がインドネシア・バリにて第4回 ASEAN－JAPAN ワークショップに出席 …… 4858
●ハンブルク大学－京都大学共催シンポジウム 2017 を開催 …… 4859
●山極壽一 総長がハンブルクトランスナショナル学長協議会（The 2017 Hamburg Transnational University Leaders Council）に参加 …… 4861
●第3回ボルドー大学－京都大学共催シンポジウムを開催 …… 4862
●体育会による壮行会を開催 …… 4864
●平成29年度京都大学創立記念行事音楽会を開催 …… 4865
●2017年度双青戦の開会式を開催 …… 4865
●株式会社東洋新薬との連携協定を締結 …… 4866

［部局の動き］

●大学院理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター仮研究棟を披露 …… 4867
●大学院理学研究科花山天文台で「京の夏の旅」オープニングセレモニー開催 …… 4867
●霊長類研究所50周年記念式典・記念祝賀会を開催 …… 4868
●東南アジア地域研究研究所 発足記念シンポジウム・記念式典・記念祝賀会を開催 …… 4869

［寸　言］

学舎は遠きにありて　横内　龍三 …… 4871

［随　想］

日独文化研究所の活動について …… 4872
名誉教授　阿部　光幸

［洛　書］

実践的な知識創造と忖度　金　広文 …… 4873

［話　題］

●平成28年病院長賞表彰式を挙行 …… 4875
●京都大学研究資源アーカイブが新たな資料を公開 …… 4876

［訃　報］

倉田　学児　教授 …… 4878

京都大学

巻頭言

大学を取り巻く状況

総務・労務・人事担当理事　森田　正信

今，大学に対しては，各方面から様々な指摘，要請が寄せられ，その声がますます高まっているように感じます。

我が国は，もはや右肩上がりの成長をする国ではなくなり，人口も減少期に入っています。社会のどのセクターも経済的な余裕はなく，経費の切り詰め，正規雇用の縮小，経営の合理化を図ってきています。

以前は大学にそれほど期待されることのなかった社会人基礎力の育成や語学教育，海外留学，社会人教育，開発研究も，大学で行ってほしいという要請が高まっています。進学率が伸びたという変化もありますが，かつての大学は，もっとゆったりと基礎研究や，人間性や教養の涵養を行っていたと思います。それが「象牙の塔」とか「レジャーランド」と批判される原因でもあったと思いますが，そうした落ち着いた環境の中から，研究教育の成果が生み出されてきた面もあったと思います。

今，大学は，社会のニーズに応えて様々な取組を行うようになり，みんなが多忙になっています。社会全体に何かいつも「改革」をしていなければならないようなムードがあり，まだまだ「改革」が不十分という声が常に出続けている状況です。

社会の変化は急激であり，改革は必要ですが，それは大学の力を強化することを目指しているはずで，劣化させるものであってはならないはずです。その点で，特に懸念されることは，教員の業務が増え，研究時間が減少し，論文数の伸びが鈍くなっていること，職員の定員削減や非正規化が進み，種々の事務作業を教員が行うようになっていること，若手研究者のポストが不安定となって，博士課程へ進学し研究者を目指す優秀な学生が減少していることなどの指摘です。

2000年頃から，改革を誘導するための資金配分の方法として，競争的資金などの公募型資金制度の拡充が図られてきました。当初は良い仕組みだったと思うのですが，その手法をとり続けることがもたらす長短両面の影響が十分顧みられることなく，研究面でも教育面でもそうした補助事業の手法が繰り返し用いられ，拡大しています。

このことについて，競争的資金を配分しているJST（国立研究開発法人 科学技術振興機構）自身が，競争的資金の種類がどんどん増え，一つ一つが小さいものも作られ，科研費以外の競争的資金の体系が複雑化していると警鐘を発しています（「我が国の研究費制度に関する基礎的・俯瞰的検討に向けて」中間報告書，2014年度）。

種々の政策目的のために政策当局の各部署がそれぞれに補助制度を作っています。毎年，成長戦略などで新しい施策を立ち上げていかないと，「改革」に取り組んでいるように見てもらえず，予算がとれないという政策担当者の立場もあります。各補助制度は数年で終了し，次々と制度が生まれては消え，大学は，それらの獲得に向かいます。後継事業に衣替えする際に，前の事業との違いを出さなければ予算が認められないため，殊更に新しい要素を加えるようなことも起

巻頭言

こります。もともと公募型資金は，その申請や評価といった負担を伴うものである上に，いろいろなものが林立し，研究教育の中身以外の業務での多忙化を招いているおそれがあります。個人補助はいいのですが，機関補助のものが増え，補助終了後も，大学の自助努力で継続することが求められるようになっており，このことも大学に様々な業務を発生させる要因になっています。

同じコストなら，公募型資金を体系的に整理統合して，基盤的経費に充当する方が大学のパフォーマンスを高めるワイズスペンディングになるという面があると思えてなりません。

本年４月，理事に就任し，母校である本学の運営の一端に携わることとなり，光栄に感じております。

これまで，文部科学省で，高等教育，研究振興，私学，初等中等教育などの部署で仕事をしてまいりました。基盤的経費と公募型資金の関係の在り方について，上述の問題意識から，省内で議論したこともありましたが，高等教育政策については，様々な方面からの指摘，要請にこたえなければならない状況にあり，総論では賛成でも，各論ではそれぞれの補助制度にそれぞれ事情があるというのが実情です。

京都大学は，人文・社会・自然科学の各分野にわたり，多様で独創的な研究教育の伝統，実績を誇る大学であり，今後もその使命を果たしていくためには，研究時間の確保や若手研究者のポストの確保のための環境整備は，極めて重要なことだと思います。

基盤的経費には，機械的に資金を配分するというイメージがあり，評価に基づきメリハリを付けて配分する競争的な公募型資金の方が質の向上に資するという認識が根強く支持されています。しかし，それも程度問題であるということを，説得力を持って示せるエビデンスを発信できないものかと思います。

大学としては，物件費，間接経費を含めた毎年の財政規模について，ある程度見込みを立てられると思います。それも踏まえて，若手研究者や職員の長期雇用ポストを確保することをもっと考えてよいかもしれません。

京都大学は，今，様々な改革に取り組んでいますが，研究型大学としての戦略的な資源配分を考えていくことは，今後ますます重要になると思います。

総務・労務・人事担当の立場から，関係の皆様のご意見をよくお聞きし，少しでも知恵を絞り，大学の運営のために微力を尽くしたいと思っておりますので，ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

目次に戻る

大学の動き

名誉教授懇談会を開催

百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて6月23日(金)に名誉教授懇談会を開催し，75名の名誉教授の他，総長，理事，副学長，部局長等あわせて100名が出席しました。

懇談会は，山極壽一 総長による本学の近況を交えた挨拶に続いて，井村裕夫 元総長による乾杯の発声により始まりました。

挨拶をする山極総長

乾杯の発声をする井村元総長

会場では，出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事，近況報告等に話が弾み，盛会のうちに執り行われました。

懇談会の様子①

懇談会の様子②

（総務部総務課）

目次に戻る

京都大学春秋講義（平成29年度春季講義）を開催

京都大学春秋講義は，京都大学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について，広く学内外の人々と共有を図るため，1988（昭和63）年秋から開講している公開講座です。

今回は，メインテーマを「観光のまち 京都」として3回講義を行いました。1回目の4月19日（水）は前川佳一 経営管理大学院特定准教授による「観光経営を京都で考える」，2回目の4月26日（水）は川﨑雅史 工学研究科教授による「京都の景観とまちづくり―辺（ほとり）から生まれる賑わい」，3回目の5月10日（水）は高

会場の様子

大学の動き

木博志 人文科学研究所教授による「近代における京都イメージの創造―雅・国風・もてなしの文化」と題して講義を行いました。3日間で1,020名の参加があり，講義後には活発な質疑応答が行われました。

参加者からは，「一般的な経営学理論を踏まえて観光業の説明をしていただき，大変分かり易かった」，「京都における景観の考え方，見方がわかった。紹介された地域に是非出向いてみたい」，「京都のイメージが様々な歴史の動きの中で形成されたものであり，その裏に隠されてしまったものもあったことを知り，驚いた」などの感想が寄せられました。

（総務部（渉外課））

目次に戻る

クロックタワーコンサートを開催

京都大学と京都市立芸術大学が主催して毎年開催している「クロックタワーコンサート～京都大学と京都市立芸術大学による交流の午後～」を，5月21日（日）に百周年時計台記念館にて開催しました。今回は，「レクチャー&コンサート ザ・バロック」と題し，京都市立芸術大学をこの3月に退職された増井信貴 名誉教授と，後任として4月から着任された下野竜也 教授の新旧の指揮により，京都市立芸術大学アカデミーオーケストラが演奏を行いました。

コンサートでは，本学より森田正信 理事が開会の挨拶を行った後，G.F.ヘンデルの「王宮の花火の音楽」から序曲，A.ヴィヴァルディの「四季」から「春」および「秋」，J.S. バッハの「管弦楽組曲第2番ロ短調BMV1067」，O.レスピーギの「リュートのための古風な舞曲とアリア第三組曲」等が演奏されました。曲の合間には，曲の時代背景や楽器などについての簡単なレクチャーもあり，最後の増井名誉教授の指揮による演奏が終わると，惜しむように鳴り響く拍手が沸き起こり，それに応えてアンコールの演奏がされ，会場はバロック音楽の余韻に包まれました。

参加者からは，「バロックの音楽をまとまって聴いたのは初めてなので感激しました」，「学生の皆さんの演奏する姿がとてもみずみずしく引き込まれました」，「ステージの若葉の背景に野外コンサートのような開放感があり，感動した」などの感想が寄せられました。

コンサートの様子

（総務部（渉外課））

目次に戻る

大学の動き

平成 29 年度　総長裁量経費採択事項

平成29年度の総長裁量経費については，下記の35件が採択されました。
採択事項および対象部局等は次のとおりです。

プロジェクト等事項名	部局名	関連部局
卓越した課程博士論文の出版助成事業	文学研究科	
京都で学ぶ人文学 2.0 （英文名：Learning Humanities @ Kyoto）	文学研究科	
若手研究者出版助成事業	教育学研究科	
若手研究者に係る出版助成事業	法学研究科	
若手研究者の優秀学位論文等出版事業	経済学研究科	
パラボリックフライトを用いた微小重力下における社会的認知・認知進化に関する研究教育活動	理学研究科	学際融合教育研究推進センター（宇宙総合学研究ユニット），霊長類研究所，高等教育研究開発推進センター
生物学映像・画像アーカイブの構築	理学研究科	
理学からのオープンサイエンスデータ推進とその新展開	理学研究科	
脳科学分野における部局横断型教育研究拠点の構築と若手研究者育成	医学研究科	
レイト・スペシャリゼーションを支援する課題解決型少人数教育，能動型学修	薬学研究科	
大学院学生の研究活動と講義参加の両立を保障するテレビ授業システム	農学研究科	
若手研究者出版助成制度	人間・環境学研究科	
世界のアフリカ研究を牽引した「京大レガシー」の出版助成事業	アジア・アフリカ地域研究研究科	
地球環境学堂ベトナム研究の総括と発信事業	地球環境学堂	
若手研究者による人文科学諸分野の優れた研究成果の刊行助成事業	人文科学研究所	
世界気象機関（WMO）と連携した発展途上国若手気象実務者の能力開発	防災研究所	
防災ミュージアムの相互連携による総合的防災・減災コンテンツの整備	防災研究所	
デジタルデータの長期保存に関する国際会議（iPRES2017）の開催経費	東南アジア地域研究研究所	
東南アジア研究に関わる若手出版助成	東南アジア地域研究研究所	
Visual Documentary Project 2017 プノンペンおよび日本上映会開催	東南アジア地域研究研究所	
医学教育シンポジウム「成人学習における発達特性とパーソナリティーの多様性」	医学部附属病院	

大学の動き

プロジェクト等事項名	部局名	関連部局
サイバーフィールドワークによるジュニア世代への広報推進事業	学術情報メディアセンター	人間・環境学研究科, 情報環境機構
京都大学の教育コンテンツの活用を通じて高大接続を促進するためのポータルサイトの構築と活用支援	高等教育研究開発推進センター	学際融合教育研究推進センター（高大接続科学教育ユニット）
標本を基軸にした分野横断型博物館科学の構築と大学博物館国際連携	総合博物館	
福井謙一記念研究センター環境改善事業	福井謙一記念研究センター	
人文社会科学と情報学・認知科学の連携構築事業	こころの未来研究センター	
全学共通科目の生物系コア科目における共通教科書・教材作りに向けた図版作成	国際高等教育院	
京大・ブータン連携 60 周年記念事業：第 4 代国王による GNH シンポジウムの開催	高等研究院	学際融合教育研究推進センター（ヒマラヤ研究ユニット), 東南アジア地域研究研究所, 霊長類研究所, 教育学研究科, 医学研究科, 地球環境学堂, こころの未来研究センター
京都大学アフリカ研究オン・サイト・セミナー	アフリカ地域研究資料センター	
京都大学アフリカ研究出版助成	アフリカ地域研究資料センター	
学術分野越境実践活動による京大ブランド強化	事務本部（企画・情報部［学際融合教育研究推進センター］）	
放射線リスクコミュニケーション教育に係る人材養成事業	事務本部（施設部［環境安全保健機構］）	
京都大学健康づくりオープンラボ　開設事業	事務本部（施設部［環境安全保健機構］）	国際高等教育院
国際広報活動における海外向け多言語コンテンツ作成強化事業	事務本部（総務部）	
「琵琶湖周航の歌」百周年記念事業	事務本部（教育推進・学生支援部）	

（財務部（財務課））

目次に戻る

大学の動き

指定国立大学法人に指定

本学は，6月30日（金）に指定国立大学法人に指定されました。

指定国立大学法人制度は，優秀な人材を引きつけ，研究力の強化を図り，社会からの評価と支援を得るという好循環を実現する戦略性と実効性を持った取組を提示でき，かつ自らが定める期間の中で，確実な実行を行いうる大学を指定国立大学法人として文部科学大臣が指定するものです。

指定国立大学法人制度の概要と本学の構想は以下のとおりです。

1．指定国立大学法人に求められるもの

指定国立大学法人は，現在の人的・物的リソースの分析と，今後想定される経済的・社会的環境の変化を踏まえ，大学の将来構想とその構想を実現するための道筋および期間を明確化することが求められます。また，社会や経済の発展に与えた影響と取組の具体的成果を積極的に発信し，国立大学改革の推進役としての役割を果たすことが期待されます。

2．指定国立大学法人が備えるべき６つの要素

指定国立大学法人は，次の６つの要素について取組や目標を設定します。

- 人材育成・獲得
- 研究力強化
- 国際協働
- 社会との連携
- ガバナンスの強化
- 財務基盤の強化

3．京都大学の掲げる指定国立大学法人構想

本学は，2．に挙げられた６つの要素を踏まえ，創立以来築き上げてきた伝統を基礎に，新しい大学の在り方とその構想を打ち出し，現代の世界と人類が直面する多くの課題解決に向けて挑戦を続けます。

- 分野を問わず極めて顕著な業績を有する研究者を中心に，世界最先端研究を推進するための研究拠点を組織し，独創的な研究を推進
- 現地運営型研究室を世界各国に設置し，研究交流を土台とした教育・産学連携・人材交流を推進
- 人種・民族・国境の壁を越えて，世界から多様な人材を獲得・育成するとともに広く人材を世界に輩出していく「頭脳循環」の仕組みを強化
- 本学の独創的な最先端の研究やこれまで蓄積されてきた知を総動員することにより，世界に広がる社会課題についての研究を展開し，イノベーションを牽引
- 多様な組織の自立性を尊重した強力な本部ガバナンスの徹底と迅速な施策の執行
- 本学独自の収益事業によりコーポレート・ガバナンスを強化し，社会的価値創出の最大化を図り，本学の研究成果・知的財産の活用を促進

【参考 URL】

京大 HP「京都大学 指定国立大学法人構想について」

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/publication/designation/index.html

文科省 HP「第３期中期目標期間における指定国立大学法人の指定について（平成29年度の報道発表）」

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/1387558.htm

大学の動き

本学の指定国立大学法人構想概要

●山極壽一 総長コメント

このたび，京都大学は文部科学大臣から指定国立大学法人の指定を受けました。本学が掲げる構想が認められたことを嬉しく思うとともに，これからますます努力を惜しむことなく，本学の教育力と研究力を強化していくことへの大きな責任を感じ，身が引き締まる思いです。

京都大学は基本理念に基づき，これまでも地球規模の様々な課題に挑戦し続け解決策を見出すことで，日本のみならず国際社会に広く貢献し続けてきました。現在，京都大学では，本学が歩むべき指針としてWINDOW構想を掲げており，指定国立大学法人への申請にあたっては，この構想を踏まえた議論を1年にわたって積み重ね，概要（上記参照）に示すような構想をまとめました。今回掲げた構想を着実に実行していくことで，世界第一線の大学として，国際社会との協調，連携を推進しながら，地球社会の調和ある共存に貢献し続けます。

本学が指定国立大学法人の取組として打ち出した「4つの柱」は，以下の目標を実現します。

1．柔軟かつダイナミックな体制による知の創造

学内組織間の境界を越えた自由で弾力的な教員間の相互作用により，世界を先導する最先端研究をさらに伸長させ，未踏領域を切り開く。

2．高度で多様な頭脳循環の形成

学生から教員まで，国内外の多様な人材を本学に受け入れ育成し社会に輩出することで，様々なセクターとの間で積極的な交流を推進する「人の循環」を作り出す。

大学の動き

3．新たな社会貢献を目指して

伝統ある学術分野の国際化と学際化を推進し，新たな価値を発信することで，社会にインパクトを与える。ホールディング・カンパニー設立を視野に，産官学連携活動を推進する体制を再構築し，研究成果を社会に還元する。

4．世界に伍する京大流大学運営

恒常的にトップダウンの方針とボトムアップの提案を調整できる大学運営体制を構築し，多様な教育研究組織の自立性を尊重しつつ強力な本部ガバナンスの徹底と迅速な施策実行を可能にするとともに，安定的な自己収入確保のための基盤を強化する。

指定国立大学法人制度は，真に人類と社会に貢献できるよう大きく発展していこうとする我々の努力を強く後押しするものであると理解しています。また，これから世界の有力大学に伍して第一線で活躍できるだけの基盤や体制を整えるためにも，政府に対し規制緩和や法改正を要望し続けていく所存です。日々京都大学を応援してくださる皆様におかれましては，指定国立大学法人として構想の実現に向けこれまでにない挑戦へ取り組むことへの御理解，御支援を賜りますよう，よろしくお願いいたします。

（企画・情報部（企画課））

目次に戻る

京都大学 ASEAN 拠点から国際交流基金バンコク日本文化センターへ学術情報メディアセンター開発 CALL（Computer Assisted Language Learning）教材を贈呈

5月11日（木），18日（木）に独立行政法人国際交流基金バンコク日本文化センター主催の第5期日本語パートナーズレセプションにて，学術情報メディアセンターが開発したCALL教材の贈呈式が行われました。

教材の贈呈

贈呈したCALL教材は学術情報メディアセンターの語学教育システム研究分野・壇辻研究室が開発したマルチメディア多言語語学学習教材で，英語，中国語，タイ語で日本の紹介ができ，日本の文化や風土，京都を紹介する内容で構成されています。

昨年度の贈呈に引き続き，今年度は69名のタイ第5期の日本語パートナーズの皆さまへ柴山　守 ASEAN拠点所長からCALL教材「発信型マルチメディア日本語教材「日本の風土と文化」」69組を贈呈しました。

国際交流基金バンコク日本文化センターの日本語パートナーズ派遣事業は，日本語教師・学習者のパートナーをASEAN諸国に派遣し，日本語授業のアシスタントや日本文化の紹介を行っています。タイ第5期のパートナーズ69名は全国35県の中等教育機関に派遣され，現地の言葉や文化についても学びを深め，日本とタイを繋ぐ架け橋としての役割を果たすことを目指しています。

大学の動き

本式典で国際交流基金バンコク日本文化センターから配付された資料によると，タイの高校での日本語学習者数は約11万人であり，機関数・教師数・学習者数共に年々増加しています。今後さらに日本からタイへ日本語教育支援の貢献が期待されます。

【関連リンク】

マルチメディア多言語CALL教材（文化発信型コンテンツ）の開発

Development of Multilingual Multimedia CALL Materials-Introduction to Japanese Traditional Culture

http://ict-nw.i.kyoto-u.ac.jp/ict-innovation/10th/panel/panel.php?id=25

記念集合写真

（企画・情報部（企画課））

目次に戻る

稲葉カヨ 理事・副学長がインドネシア・バリにて第４回 ASEAN － JAPAN ワークショップに出席

４月20日（木）にインドネシア・バリにて，第４回ASEAN－JAPANワークショップが開催され，本学からは稲葉カヨ 理事・副学長と関係職員が出席しました。

本学の取り組みを発表する稲葉理事・副学長

本会議は，STSフォーラム（科学技術と人類の未来に関するフォーラム）が毎年，ASEANで開催するワークショップで，日本・ASEAN双方から産官学の代表者らが参加し，イノベーション・科学技術分野における協力と発展に向けて話し合う場となっています。

今回は「経済成長のための技術革新」をテーマとして，STSフォーラム，日本貿易振興機構（JETRO），インドネシア技術評価応用庁（BPPT）による共催，在インドネシア日本国大使館，ASEAN日本政府代表部，インドネシア研究・技術・高等教育省（RISTEKDIKTI）およびインドネシア科学院（LIPI）の後援により開催されました。ASEAN諸国や日本の政府関係機関，企業，大学・研究機関からあわせて約125名が参加しました。

会議は，基調講演に続き，２部構成の発表･討論形式で行われ，午前のセッション１では「経

大学の動き

済成長のためのイノベーション：産官学の連携」について，午後のセッション２では，「持続的発展のためのスマートシティ」について議論されました。

稲葉理事・副学長は午前のセッション１で，現在，京都大学が東南アジア諸国の機関とともに実施している共同研究プロジェクトについて発表しました。

次回，第５回ASEAN－JAPANワークショップは2018年にフィリピンで開催予定です。また，第14回STSフォーラム年次総会は2017年10月１～３日に京都で開催される予定です。

会場の様子

（企画・情報部（国際交流課））

目次に戻る

ハンブルク大学－京都大学 共催シンポジウム 2017 を開催

６月６日（火）～８日（木）にドイツ北部のハンブルク大学にて，ハンブルク大学－京都大学 共催シンポジウム2017を開催しました。本学からは，山極壽一 総長，稲葉カヨ 理事･副学長，教員，博士後期課程学生，国際担当職員の31名が参加しました。

ハンブルク市庁舎でのオープニングセレモニー

ハンブルク大学は，ドイツ第２の都市ハンブルクに本部を置く国立大学で，４万人を超える学生が在籍しており，本学とは約２年前から交流が活発になっています。今回のシンポジウムは，両大学の交流をさらに深化させる目的で，双方の研究の蓄積をもとに共同研究の展開が期待される6つの領域(碑文学，物理学，法学・経済学，高分子化学，日本学，感染症）において，最新の研究成果を共有し研究交流・連携を促進することを目指しています。

ディーター・レンツェン ハンブルク大学長主催のオープニングディナーと，シンポジウム初日の開会式には，来賓として，八木 毅 在ドイツ連邦共和国特命全権大使，安沢隆男 在ハンブルク総領事，ヨォーク・シュナイダー ドイツ研究振興協会（DFG）国際交流部部長・日本代表部代表，小平桂一 日本学術振興会（JSPS）ボン研究連絡センター長にご出席いただき，ドイ

大学の動き

ツと日本の学術交流推進について歓迎と激励の言葉をいただきました。

シンポジウム初日には，両学長と八木大使の挨拶に続き，大学間学術・学生交流協定の調印式が行われました。この協定の締結により，学生の交換留学を含む，さらなる研究・教育交流の拡大を促進することが期待されています。

パラレルセッションでは，6つの研究分野の研究者が最新の研究成果の発表と共に，今後の研究交流計画について討議を行い，最終日には，全体会にて各研究グループの代表者が今後の共同研究テーマ候補や，具体的なプロジェクト提案，ワークショップの計画等を報告しました。

3日間に渡るシンポジウムは，両大学の研究交流だけでなく人的交流も促進し，各分野の共同研究プロジェクトの設立を促進するうえで非常に有効なものとなりました。

第2回の共催シンポジウムは，2018年秋に本学にて開催予定です。

レンツェン学長の開会式挨拶

山極総長の開会式挨拶

八木大使の開会式挨拶

開会式の様子

大学間学術・学生交流協定調印式

パラレルセッション（法学・経済学）

ラップアップセッション（高分子化学の発表）

大学の動き

【関連リンク】
Universität Hamburg - Kyoto University Symposium 2017
http://www.oc.kyoto-u.ac.jp/symposium/Hamburg-kyoto-symposium2017/
https://www.uni-hamburg.de/en/internationales/profil/hochschulpartnerschaften/kyoto/symposium.html

シンポジウム参加者集合写真

稲葉理事・副学長の閉会挨拶

（企画・情報部（国際交流課））

目次に戻る

山極壽一 総長がハンブルクトランスナショナル学長協議会（The 2017 Hamburg Transnational University Leaders Council）に参加

全体会で発言する山極総長

6月7日（水）～9日（金）にドイツのハンブルクで開催された第2回ハンブルクトランスナショナル学長協議会に，山極壽一 総長が出席し，「The Steering of National Post-Secondary Systems: Autonomy Versus Accountability（国立高等教育機関の運営：自律性と説明責任）」と題したフォーラムの議長を務めました。

この協議会は，ドイツ大学学長会議（HRK），ケーバー財団（Körber-Stiftung），ハンブルク大学の共催により，高等教育における現在の重要問題を議論するために，世界各地の有力大学の学長が集い議論することを目的として行われるものです。第2回の今回は「Differentiation in the Post-Secondary Sector: a response to Massification, Competition, and the Emergence of the Global Knowledge Economy」というメインテーマのもと，高等教育システムにおける現状と課題，今後の発展の方向性について，世界26カ国から約50名の学長が集まり，様々な視点から集中した議論が繰り広げられました。

山極総長は分科フォーラムの議長を務める一方で，全体会では「高等教育はどのようにしてよりユニバーサルになり得るか。MOOCs，OCWや，情報通信技術（ICT）を世界各地の大学で今後どのように教育に活用すべきかも重要な論点となってくる」と提言し，出席者の賛同を得ていました。

大学の動き

協議会の最終日には，前日までの議論に基づいて作成した「The Hamburg Declaration：ハンブルク宣言」が採択されました。この文書は今回の協議会の結論をまとめたもので，「Organising Higher Education for the 21st Century」と題し，世界の高等教育の現状，研究大学の役割，高等教育機関間の効果的な役割分担のための要件について概説，提言しています。

第３回の開催は2019年に予定されています。

【関連リンク】

The Hamburg Declaration：

http://www.htulc.de/press/hamburg-declaration-20170609.pdf

全体ディスカッションの様子

学長協議会参加者 集合写真

（企画・情報部（国際交流課））

目次に戻る

第３回ボルドー大学－京都大学共催シンポジウムを開催

フランス・ボルドー大学において，第３回ボルドー大学－京都大学共催シンポジウム2017を６月29日（木），30日（金）に開催しました。本学からは，湊　長博 理事・副学長をはじめ，松田文彦 国際担当理事補ほか教員，国際担当職員の計14名が参加しました。

ボルドー大学とは，2014年の第１回シンポジウム開催以来，国際共同ラボの設置など活発な交流が続いております。そのような中，今回のシンポジウムでは「先端的医工分野における科学技術イノベーションの創出」をテーマに，大学と企業との医学・工学分野における共同研究・開発にスポットをあて，新たな試みとして，関連企業７社（CHANEL，日本IBM株式会社，プレキシオン株式会社，JSRライフサイエンス株式会社，株式会社島津製作所，田辺三菱製薬株式会社，東芝メディカルシステムズ株式会社）から９名の参画も得て，大学と企業のさらな

開会挨拶をする湊理事・副学長

Pierre Dos Santos 研究担当副学長による基調講演

閉会挨拶をする Vincent Dousset 国際関係担当副学長

大学の動き

る連携の未来を見いだす機会の創出を目的として開催しました。

ボルドー大学側からは研究者14名，関連企業20名，また協定校である国立台湾大学からも2名が，それぞれの取り組みと成果を発表いたしました。

シンポジウムは，Vincent Dousset ボルドー大学国際関係担当副学長，ならびに湊理事・副学長の挨拶に始まり，続いてPierre Dos Santos ボルドー大学研究担当副学長による「大学から企業への技術移転について」と題する基調講演が行われました。

その後，Cohort Study and Human Biology, Diagnostic Equipment and Biomaterials, Medical Imaging, Drug Development の4分野について，本学，およびボルドー大学研究者と関連企業担当者が交互に共同研究や開発の成果，その応用例を報告するとともに，それぞれの発表内容に関する活発な質疑応答が行われました。また参加企業は，開発した機器やポスター展示を行い，臨床などの現場における実用例などについて解説を行いました。

ROUND TABLE「ARTIFICIAL INTELLIGENCE AND IMAGING : A REVOLUTION?」

2日間にわたるシンポジウムは，両大学と企業とのこれまでの共同研究成果の発表だけでなく，今後の共同研究や開発についての可能性を模索するためのネットワーキング活動も活発に行われ，非常に有意義なものとなりました。

参加企業による事例の紹介（SHOWROOM PRESENTATIONS）

また，シンポジウムに先だって6月28日（水）には，ボルドー大学主催のInnovation Dayが開催され，近藤輝幸 本学工学研究科教授が，CKプロジェクト（京都大学とキヤノン株式会社が協働して実施した「高次生体イメージング先端テクノハブ」プロジェクト）での産学共同の成功例を報告しました。

シンポジウム参加者集合写真

大学の動き

【関連リンク】
http://www.oc.kyoto-u.ac.jp/symposium/bordeaux-kyoto-symposium2017/
http://week26.u-bordeaux.fr/

（企画・情報部（国際交流課））

目次に戻る

体育会による壮行会を開催

4月24日（月）クスノキ前広場にて体育会壮行会が開催され，各クラブが勢揃いしました。

この催しは毎年，体育会各所属団体の活躍と体育会全体の発展を期して行われているもので，体育会所属の全クラブのメンバーが集結したほか，昼休みの時間とあって，多くの学生，教職員が見守る中盛大に開催されました。

壮行会は，山極壽一 総長，川添信介 理事・副学長，守屋和幸 体育会会長等を迎え盛大に執り行われました。山極総長の挨拶に始まり，中村聡一郎 体育会幹事長より体育会を代表し挨拶がありました。その後，アメリカンフットボール部，植村佳史さんによる力強い選手宣誓が行われた後，応援団による力強い演舞が披露されました。

山極総長のご挨拶

中村体育会幹事長のご挨拶

アメリカンフットボール部 植村さん選手宣誓

応援団による演舞演奏の様子

大学の動き

参加したクラブの学生達は，七大戦をはじめとして，今後の大会の勝利を誓い合っていました。春の陽気のなか，力強く盛大な壮行会となりました。

（教育推進・学生支援部（厚生課））

目次に戻る

平成 29 年度京都大学創立記念行事音楽会を開催

6月18日（日）の本学創立記念日を祝し，第61回京都大学創立記念行事音楽会「熊本マリピアノリサイタル ～トークを交えて～」を6月21日（水）に京都コンサートホールで開催しました。

今年度はピアニストの熊本マリさんにご出演いただき，F.ショパン：『ノクターン第20番 嬰ハ短調 遺作』やF.リスト：『愛の夢 第3番 変イ長調』，熊本民謡『おてもやん』など，力強く美しいピアノの演奏をご披露いただきました。演奏後のアンケートでは，「深い音色に感動しました」「曲だけでなく，曲の背景にある作曲家の想いも知ることが出来ました」といった感想が寄せられました。会場に来られた皆さんは，熊本さんが奏でるピアノの音色とご自身のエピソードを交えたトークの前に，しばしの癒しの時間を過ごされた様子でした。

熊本マリさんピアノ演奏

熊本マリさんトーク

（教育推進・学生支援部（厚生課））

目次に戻る

2017 年度双青戦の開会式を開催

東京大学・京都大学の各運動部の総合対抗戦である双青戦の開会式が，6月24日（土）に京都大学時計台記念ホールにて盛大に行われました。

最初に，山崎友希 実行委員長（京大）による開会宣言があり，続いて山極壽一 総長，守屋和幸 体育会会長，来賓の石井洋二郎 東京大学副学長の挨拶がありました。

応援団による演舞演奏の様子

大学の動き

寺坂俊祐 ソフトボール部主将（京大）による選手宣誓の後に，競技種目の紹介映像の上映が行われ，最後に，両校の応援部･応援団によるユーモラスで力強い演舞演奏が行われました。

また，開会式後には，吉田南構内の生協食堂にてレセプションが開催され，関係者一同なごやかな雰囲気の中，懇親を深める時間を過ごしました。

（教育推進・学生支援部（厚生課））

目次に戻る

株式会社東洋新薬との連携協定を締結

本学と株式会社東洋新薬は，健康食品，化粧品等における共同研究の推進，およびビジネスシーズの探索を通じて，健康食品，化粧品等の新たな市場を創造し，社会に貢献するために，相互に連携･協力していくことに関し，6月29日（木）に協定を締結しました。

（左）服部 代表取締役（東洋新薬）、（右）阿曽沼 理事（京大）
於：京都大学吉田キャンパス国際科学イノベーション棟

協定締結に伴う記者発表を国際科学イノベーション棟で行い，阿曽沼慎司 理事・産官学連携本部長および服部利光 株式会社東洋新薬代表取締役による協定書の調印，本連携に対する期待などを含めた挨拶を行いました。

本協定では，本学が有する革新的で多様な研究シーズを戦略的に探索し，東洋新薬のビジネスノウハウや商品企画力を活用することにより，健康食品，化粧品等の新規機能性素材の開発および実用化に関する共同研究を創出し，効果的に実施するための両者間の組織的な連携を遂行することを目指します。

（研究推進部（産官学連携課））

目次に戻る

部局の動き

大学院理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター仮研究棟を披露

熊本県南阿蘇村にある理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター本館は，熊本地震により被災し使用不能となっているため，阿蘇市の旧小学校校舎を仮研究棟として改修し，披露式が6月12日（月）に行われ，学内外関係者約30名が出席しました。平野丈夫 理学研究科長，佐藤義興 阿蘇市長らが看板を除幕し，業務再開を祝いました。

熊本地震で同センター本館は沈下したほか，壁が一部崩れて，計測器などが損壊して被害が出ました。このため大津町と阿蘇市役犬原の2カ所に事務所を置き，観測・研究活動を続けていました。仮研究棟は被災した本館が復旧するまでの間，研究・教育の拠点として使用します。

除幕された火山研究センターの看板

（大学院理学研究科）

目次に戻る

大学院理学研究科附属花山天文台で「京の夏の旅」オープニングセレモニー開催

大学院理学研究科附属花山天文台が，普段は非公開の文化財特別公開などを行う夏の京都観光の恒例行事「京の夏の旅」（京都市・京都市観光協会主催）の対象施設となり，7月5日（水）にオープニングセレモニーが現地で開催されました。

セレモニーでは門川大作 京都市長，寺田一博 京都市会議長ほか関係者列席のなか，稲葉カヨ 理事・副学長が挨拶を行い，同天文台が京都市内の小中学生の見学に利用されていることに触れて，子供たちが科学に触れるきっかけとなっており，大学

9m のドームがある本館前での記念撮影

部局の動き

の地域への貢献の一例でもあるとして天文台への支援を呼びかけました。

テープカットに引き続いて施設の内覧会が柴田一成 天文台長の案内で行われ，望遠鏡や貴重な天体観測資料について，参加者が熱心に見入っていました。

第42回「京の夏の旅」は，9月30日（土）まで開催されます。

施設内を案内する柴田天文台長

（大学院理学研究科）

目次に戻る

霊長類研究所 50 周年記念式典・記念祝賀会を開催

霊長類研究所は，創立50周年を記念して，6月1日（木）に名鉄犬山ホテルにて記念式典および記念祝賀会を開催しました。

記念式典にて，総長が講演する様子

記念式典では，湯本貴和 霊長類研究所長の式辞の後，山田拓郎 犬山市長，寺門成真 文部科学省研究振興局学術機関課長，平野丈夫 理学研究科長より祝辞が述べられました。その後，湊　長博 理事･副学長の挨拶に続き，山極壽一 総長が「世界の霊長類学･日本の霊長類学」と題した記念講演を行いました。最後に祝電の披露があり，式典の閉会を迎えました。

式典終了後，記念祝賀会を開催しました。渡邊隆司 副理事の挨拶の後，野田浩絵 文部科学省研究振興局ライフサイエンス課ゲノム研究企画調整官，井本敬二 自然科学研究機構生理学研究所長から祝辞をいただき，第24代京都大学総長をつとめた尾池和夫 公益財団法人日本モンキーセンター理事長・京都造形芸術大学学長による乾杯の発声とともに，和やかな歓談の時がもたれました。

祝賀会ではさらに，中道正之 日本霊長類学会長，川島隆太 東北大学加齢医学研究所長，小柳義男 研究連携基盤長，幸島司郎 野生動物研究センター長，および3名の歴代所長（杉山幸丸 第8代所長，小嶋祥三 第9代所長，松沢哲郎 第11代所長）より祝辞が述べられ，盛大に50周年を祝いました。

なお，式典には211名，祝賀会には117名の参加がありました。

部局の動き

来賓集合写真

（霊長類研究所）

目次に戻る

東南アジア地域研究研究所 発足記念シンポジウム・記念式典・記念祝賀会を開催

東南アジア地域研究研究所は，6月2日（金）に新研究所発足を記念し，芝蘭会館稲盛ホール・山内ホールで，記念シンポジウムおよび記念式典，記念祝賀会を開催しました。

記念シンポジウムでは，杉原　薫 人間文化研究機構総合地球環境学研究所特任教授による「モンスーン・アジア，工業化，生存基盤の持続性」の講演が行われました。つづくパネルディスカッションでは「新研究所は何を目指すか」をテーマに，小泉順子 東南アジア地域研究研究所教授・IPCR（東南アジア研究の国際共同研究拠点）センター長，村上勇介 同准教授・CIRAS（地域情報資源の共有化と相関型 地域研究の推進拠点）センター長，石川　登 同教授・ASEAN研究プラットフォームセンター長，原　正一郎 同副所長・グローカル情報ネットワークセンター長が，今後の展望を述べました。

続いて記念式典では，河野泰之 東南アジア地域研究研究所長の開会挨拶に続き，山極壽一 総長，寺門成真 文部科学省研究振興局学術機関課長，小塩隆士 国立大学附置研究所・センター長会議第三部会長・一橋大学経済研究所長から祝辞が述べられました。

パネルディスカッション「新研究所は何を目指すのか」の様子

部局の動き

記念式典後に開催した祝賀会では，原副所長の挨拶のあと，湊　長博 理事・副学長の乾杯の挨拶が行われました。最後に，Nathan Badenoch 東南アジア地域研究研究所准教授から閉会の挨拶があり，盛会のうちに記念事業は閉会となりました。

左から，藤田幸一 東南アジア地域研究研究所副所長，原副所長，小塩第三部会長，山極総長，河野所長，寺門課長，貴志俊彦 東南アジア地域研究研究所副所長

（東南アジア地域研究研究所）

目次に戻る

寸　言

学舎は遠きにありて

横内　龍三

私は，信州の松本市で育ち，京大法学部に進学した。1967年（昭和42年）の卒業なので，今年は卒業50周年目となる。当時はまだ教養部が存在し，私は「J4」のクラスの一員となった。この秋には，J4のクラスの50周年記念同窓会が京都で開催される予定である。大学卒業後，半世紀が過ぎたという感慨と共に，一方では，あっという間の時の流れのような気もする。

大学卒業後，日本銀行に就職した。そこで約30年間勤務し，その後東京で弁護士業に数年間携わった。そして還暦の年に，北海道を営業基盤とする北洋銀行に縁があってお世話になり，副頭取，頭取を経て現在は会長職にある。北の大地，北海道での生活も早や13年目となるが，数年前から「北海道京大会」の会長を仰せつかっている。青年期，壮年期は，多くの方々と同様に仕事中心の生活であった。正直のところ京都の街や学生時代を懐かしむ気持ちはあっても，京大の動静には疎かったし，大学改革の動きへの関心も乏しかった。

北海道京大会は，名簿に登録され，連絡の取れる会員の方が200名弱存在する。数年前からは，女性の会も出来た。また，名簿には登録されていないが，北海道大学をはじめ大学関係者が100名以上はおられる模様だ。毎年，夏に総会を開催し，講演会や懇親会を行っている。近年では，京大側のご配慮により，現役の先生方にはるばる「北の大地」まで講師としてお出かけ頂いており，今年は，徳賀芳弘 副学長の講演が予定されている。

このように，北海道で同窓会の活動に関係するようになって，京大の情報誌や年報等に接する機会が俄然多くなり，また，松本　紘前総長の著書「京都から大学を変える」（祥伝社新書）などを読ませて頂いて，近年，京大が新しい大学像の実現を目指して懸命な努力を行っていることを理解するにつれ，我々同窓生も「母校の発展のため何か少しでもお役に立ちたいものだ」という気持ちが次第に強まってきている。また，京大出身の会社役員経験者による「京都大学鼎会」にも入れてもらい，昨年10月には，東京で開催された朝食懇談会で，山極壽一 総長，徳賀芳弘 副学長から大学の現況について具にお話を伺う機会を得た。

ところで，京大は2022年（平成34年）に創立125周年を迎える。大学ではこれを記念して募金活動を進めていくこととしているが，同窓生がさほど多くない北海道からではあるが，出来るだけ頑張って北海道京大会の会員の皆様から寄付を募って参りたいと考えている。大学卒業後50周年を迎える私の人生のうちで在学の4年間は，時期的には僅か数頁かもしれないが，その中身はかけがえのないものである。京都から遠く離れた地にあって，「学生・教授陣の皆さんが安心して勉学にそして教育・研究に携われるように」という思いが少しずつではあるが着実に強まってくるのを感ずる。

（よこうち りゅうぞう，北洋銀行会長　昭和42年法学部卒業）

目次に戻る

随想

日独文化研究所の活動について

名誉教授　阿部　光幸

私が京大の医学部に入学したのは1953年ですが，当時，殆どの教授は講義の際，専門用語はドイツ語，アメリカ帰りの若い助教授は英語を使うという時代でした。それ以後は何でもアメリカという傾向になったのは残念です。私は大学院時代，教授の勧めで1962年から約2年間ドイツのフライブルグ大学に留学し，医学の研究はもとよりドイツの文化にも触れ大きな刺激を受けましたので，若い人達にもっとドイツに関心を持ってもらいたいと願っています。

第二次大戦以前，日本は医学は勿論のこと物理，化学，哲学，法学など多くのことをドイツから学んだことは周知の通りです。今日ドイツはＥＵのリーダーと言っても異論はないでしょう。そのような訳で前置が長くなりましたが，この紙面を借りて現在私が評議員をしている日独文化研究所の活動を知って頂きたく筆を執る次第です。同研究所は京大と密接な関係があるにも拘わらず余り知られていないと思われるからでもあります。

日独文化研究所は1933年，清浦奎吾元首相とドイツ大使E.A.Voretzschの間で京都にドイツ文化研究所を作ることが話し合われ，これを受けて当時文相だった鳩山一郎が独逸文化研究所を設立したのに始まります。1945年の敗戦で消滅しましたが，1955年京大医学部が第14回日本医学会総会の余剰金を寄贈し，翌1956年財団法人日独文化研究所が設立され，初代研究所長に京大医学部皮膚科学の松本信一教授が就任しました。1982年，岡本道雄京大総長が第3代所長を務めた時，鴨川畔の吉田川原町に京都ドイツ文化センターが竣工し，この中に日独文化研究所が入居しました。岡本先生は同研究所の創立50周年（2006年）を記念して研究所の主軸を「哲学」とし，テーマに「近代文明と二十一世紀人類の将来」を掲げました。そしてその活動成果を発信する場として年報「文明と哲学」を発刊することを決定し，現在年報9号が出版されています。2012年岡本先生が逝去され，研究所は2014年4月から公益財団法人に移行されました。現在所長は大橋良介京都工芸繊維大学名誉教授で，名誉顧問として山極壽一京都大学総長，千玄室裏千家大宗匠，堀場厚堀場製作所社長，フンボルト財団総長H.Schwarz教授が就任しています。

この研究所の主な事業は日独学術文化に関する研究と助成，上記の年報の発行，日独学術文化に関する講習会や講演会の開催などです。昨年の哲学講座は「ハイデッガーと詩人たち」と題して大阪教育大学の松本啓二朗准教授により6回に亘って一般参加で行われました。今年は6月20日から7月25日まで，丸橋裕兵庫県立大学教授により「プラトン哲学の諸相」と題して6回に亘って初夏講座が行われます。

今後更に講演会や研究活動の充実を目指しておりますので，京大関係の方々が一人でも多く，日独文化研究所の賛助会員（法人会員1口年額1万円，個人会員1口年額3千円）となって同研究所が主宰する講演会や研究会に参加し，ご支援頂ければ幸いです。

（あべ　みつゆき，平成6年退職　元大学院医学研究科教授　専門は放射線医学）

目次に戻る

洛　書

実践的な知識創造と忖度

金　広文

最近，新聞・ニュースなどで「忖度（そんたく）」という言葉が流行している中，「洛書」に稚文を掲載させていただく機会を頂いたので，考えていることを述べてみます。忖度とは「相手の心や考え（物事の本質）を物差しで推し測ること」と定義されており，それ自体に善悪の意味はありません。例えば，福沢諭吉は「学問の独立（pp51 ～）」で「・・・自心を以て他人を忖度すべし」と述べております。これは「自分の心を理解する事により他人の心も理解できるのである。」という意味です。なお「心」とは「理性･知識･感情･意志，等の人間の精神的な作用やその元になるもの，もしくは，物事の本質をなすもの」で非常に多様な意味を持ちますが，本稿では「心」を「物事の本質」と解釈し考えを述べます。

私は大学を卒業してから，アジア地域を中心に約20ヶ国に渡航・滞在しながら大学・国際援助機関・開発コンサルタントに所属してODAの現場で開発途上国の開発計画や地域経済・交通・環境に関する問題解決型の研究，政府統計整備の研究を行ってきました。京都大学では大学の国際コースの立上げや海外リクルート活動を含む国際化に関する仕事もさせて頂いております。これまでに参加した多くの取り組みのミッションは「前例がない初めての試み」で国籍･経験・専門分野が異なるステークホルダーとの交渉・連携するチャレンジングな事が多く，困難に直面し失敗した経験もあれば，新たな発見をして達成感を得たこともありました。例えば，私が取り組んでいる経済統計の分野では統計ユーザーである学問的専門家は「形式知に基づく知識（Know-why）」に偏重し，実践的な能力やプロフェッショナルなわざ（Artistry）を軽視する傾向があります。その一方で統計実務家は勘や経験といった「暗黙知の知識（Know-how）」の蓄積には関心があるものの，Know-whyには無関心なことが多いため，学問的専門家と実務家が対話する際に「水と油の関係」になり話が平行線になりがちでした。過去に経済統計分野の専門家会議や国際支援の現場で度々そのような場面に遭遇しました。その一方でそれまで「水と油の関係」であった実務家と理論家が，共通の関心を持ちながら異なる視点で知的対決(又は共同研究）を進め新たな知見を得る場面にも立会いました。

新たな知識はKnow-howである暗黙知とKnow-whyである形式知の社会的相互作用，即ち実務・実践を通して作られます。知識創造の過程において「水と油」を化学反応させる「触媒」が必要でありますが，「触媒」に相当するものはコンセプトであり，新しいコンセプトを創造するためには，知識の実際的な意味（Know-what）を考える機会が必要であります。従って，実践的な知的発展を遂げるためには，図1に示すようなKnow-howの蓄積，Know -whyの体系化，

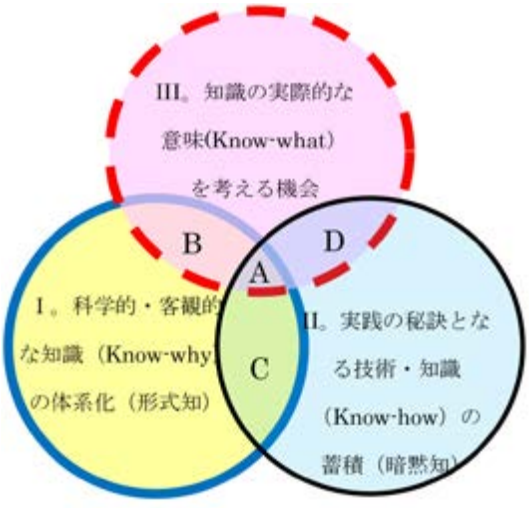

図 -1　実践的な知的発展に不可欠な要素

Know -whatを考える機会，の3つが必要不可欠です。特に図1のAのように3つの要素がバランスよく満たされる場合には，新しい研究領域を発掘し，自らの専門分野を拡大するきっかけができます。

京都大学の伝統としては木下広次 初代総長がおっしゃった有名な三つの言葉として「自重自敬」,「自学自習」,「自得自発」があります。いずれの言葉も解釈に幅がある言葉でありますが，松本　紘 第25代総長の解釈（「私は戦略を示す」京大新聞（2008年10月1日））に触れるなかで，学問とは真実を巡る人間関係の中で存在し，「自分の存在とはなにか」からはじめて他者を含めた社会のあるべき姿はどのようなものか，といったところまで考えることの集大成であることを理解いたしました。その意味で福沢諭吉が「学問の独立」で述べた「・・・自心を以て他人を忖度（そんたく）すべし」とも相通じると考えております。

実践的な知識創造と忖度を考える上で，忖度の相手を探すことや知的刺激（わくわく感）も重要であります。京都大学には無尽蔵な学問的基盤があり，忖度相手を探すには事欠きません。一方で「自ら考え行動することが苦手な人」にとっては本学はどこに何があるか分かりにくい所かも知れません。

私は幸いにも様々な場面で，恩師や上司・同僚など素晴らしい忖度相手に恵まれてきました。私が所属している経営管理大学院は工学・情報学と経営・経済学が融合した文理融合型ビジネススクールで，社会のニーズに合わせた研究･教育の場を提供しております。当然私も誰かにとっての忖度相手になることが重要です。「実践的な知識創造と忖度」という大層なタイトルで寄稿してしまいましたが，これまでの自己怠慢への自戒，及び皆様への感謝の気持ちを込めて書いてみました。

（きむ　くぁんむん，　経営管理大学院准教授　専門は開発マネジメント, 経済統計学, 地域･交通経済学）

目次に戻る

話　題

平成 28 年病院長賞表彰式を挙行

医学部附属病院は，4月26日（水）に病院長賞表彰式を挙行しました。今回が2回目の表彰式で，約200名の教職員が出席しました。

この病院長賞は，医学部附属病院における教育，研究，診療，管理運営等について，極めて顕著な貢献があったと認められる若手教職員または診療科等を表彰する制度として設けられ，全11組の個人および団体の推薦の中から4組の受賞者が決定され，表彰されました。

受賞者発表を行う稲垣病院長

表彰式では，稲垣暢也 病院長より，表彰制度設立の趣旨および受賞者の選出方法について説明された後，4組の受賞者および受賞内容について発表があり，表彰楯が授与されるとともに，祝辞が述べられました。

また，表彰式終了後には受賞者全体で記念撮影が行われ，終始賑やかな雰囲気の中で盛況のうちに閉式しました。

受賞内容

①手術部

手術部においては，2016年度は，全国国立大学附属病院の中でも第2位手術件数を誇るとともに，前年度よりも400件以上の手術件数を増加させたことにより，本院における診療部門への貢献が認められた。

②特定臨床研究実施管理委員会事務局

特定臨床研究実施管理委員会事務局おいては，臨床研究中核病院（医療法）の申請における体制整備の書類審査，訪問審査において，「特定臨床研究実施管理委員会事務局」を設け，臨床研究における病院長ガバナンス体制を強化した結果，本年3月の社会保障審議会医療分化会において，本院が指定機関として承認され，本院における医療開発部門への貢献が認められた。

受賞者全体での集合写真

話　題

③看護部看護必要度委員会

看護部看護必要度委員会においては，平成28年度診療報酬改定により，高度急性期病院の施設要件として重症度，医療・看護必要度における割合が25%以上に引き上げられたことを受け，全看護師が適正な評価を行えるよう教育・支援および記録の監査による整備を行い，評価の精度向上に寄与したことにより，本院における運営部門への貢献が認められた。

④医療安全管理室

医療安全管理室においては，本院の医療安全に関する様々な事例に対して適時適切に対応するだけでなく，問題発生の都度，本院職員からの連絡・相談にも対応できる体制を常時構築したことにより，本院における医療安全部門への貢献が認められた。

（医学部附属病院）

目次に戻る

京都大学研究資源アーカイブが新たな資料を公開

このたび，京都大学研究資源アーカイブは，新しく二つのデジタルコレクションを公開しました。

●京都大学防災研究所伊勢湾台風高潮被害調査資料，1959，2010.

URL＝http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/activity/application/digital-collection/#22

［概要］

1959年の伊勢湾台風による被災状況を調査した記録資料。おもな資料は，被災直後に京都大学防災研究所助教授の岩垣雄一が撮影した記録写真と，2010年に同研究所教授の間瀬肇が調査地を再訪して撮影した記録写真。そのほかに調査計画を綴ったフィールドノートや調査成果として作成した図表も含まれます。被災と修復の記録から約半世紀の被災地の変化を知ることができます。

［出所・作成］

岩垣雄一，間瀬肇（京都大学総合博物館蔵）

［資料年代］

1959年，2010年

［公開年］

2017年

［数量］

35mmポジフィルム131点（スライド・シート8点），JPGデータ197点，フィールドノート4枚，地図1枚，35mm ネガフィルム35点（フィルム・シート1点），紙焼き写真12枚

［メタデータ］

377レコード

半田市 康衛新田（1959）
DPRI PIC 2016/01/1007/B/1007-14/1959，京都大学防災研究所伊勢湾台風高潮被害調査資料，1959，2010.（DPRI PIC 2016/01），京都大学（京都大学研究資源アーカイブ）

話　題

●京都大学総合博物館文化史資料：沖縄関係ガラス乾板写真 , 1932.

URL = http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/activity/application/digital-collection/#23

［概要］

京都帝国大学考古学研究室が1932年6月に実施した，琉球崎樋川貝塚遺跡，琉球瓦，琉球勾玉に関する調査の記録資料，および同年10月の同大学文学部国史研究室による沖縄九州見学旅行で撮影された集合写真等。前者は京都帝国大学文学部講師であった島田貞彦による調査時のものと推測され，一部の写真は島田が残した論文での使用が確認されています。昭和初頭の沖縄をとらえた貴重な資料群です。

［出所・作成］

島田貞彦，京都帝国大学考古学研究室（京都大学総合博物館蔵）

［資料年代］

1932年

［公開年］

2017年

［数量］

ガラス乾板写真92枚

［メタデータ］

100レコード

糸満町の風景 2
TKUM PIC 2015/3/ 調 / 考 1-16/C.82-2086, 総合博物館文化史資料沖縄関係ガラス乾板写真 , 1932. (TKUM PIC 2015/3), 京都大学（京都大学研究資源アーカイブ）

京都大学研究資源アーカイブは，本学における教育や研究のプロセスでつくられた資料群を体系的に収集・整理・保存し，「研究資源」として学内外で利用可能にする取組みです。

詳しくはウェブサイトもご覧ください。

【京都大学研究資源アーカイブ】

URL = http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/

（総合博物館）

目次に戻る

訃　報

このたび，倉田学児 教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴，業績等を紹介します。

倉田　学児 教授

倉田学児先生は，平成29年6月12日逝去されました。享年47。

先生は，平成4年3月京都大学工学部衛生工学科を卒業，同6年3月同大学院工学研究科修士課程を修了，同8年3月同博士後期課程を退学し，豊橋技術科学大学工学部エコロジー工学系教務職員に採用され，同10年4月助手，同19年4月京都大学大学院地球環境学堂地球益学廊准教授に就任，同20年4月工学研究科都市環境工学専攻准教授に配置換，同29年6月教授に昇任し，環境システム工学講座大気・熱環境工学分野を担任されました。この間，平成10年9月に京都大学博士（工学）の学位を授与されています。

先生は，環境施設のプロセスシミュレーション技術の開発，大気化学輸送モデルを用いた大気汚染物質の長距離輸送プロセスの解析，大気汚染とのコ・ベネフィットを考慮した低炭素社会シナリオ構築などの分野において，基礎的・応用的研究を推進し，優れた研究業績を残され，土木学会地球環境論文賞等を受賞されています。

また，環境システム計測制御学会編集委員長をはじめ，土木学会地球環境委員会，同環境システム委員会および大気環境学会などにおいて，委員，幹事および編集委員等の要職を歴任され，京都府，京都市，大津市および大阪市等において，環境問題に関する各種委員会の委員を務められ，環境行政の円滑な遂行にも尽力されました。

（大学院工学研究科）

目次に戻る

京大広報
No.730
平成 29 年 7 月 31 日　発行
発行　京都大学総務部広報課
〒 606-8501 京都市左京区吉田本町
E-mail：kohho52@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
※ご意見・ご感想をお寄せください。「京大広報」の既刊号は，次の URL でご覧いただけます。
http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kouhou/